受賞記念講演：「今日のグローバル化し緊迫した世界情勢下での俳句の役割」

文化賞 ／ ヘルマン・ファン＝ロンパイ（日EU俳句交流大使）

現在、俳句はもはや日本だけのものではなく、世界的に人気を高めています。いつか、UNESCOにも俳句を世界遺産として認めてほしいと思います。

俳句は簡素でシンプルなものであり、どの人間にも共通にある素朴な感情について語るものであって、人生そのものです。詩人は、常に自己表現への抑えられない欲求を持っており、それゆえ不誠実な詩人というのはあまりいません。誠実さは俳句に不可欠であり、当然にあるべき属性です。また、あらゆる人間関係、社会は信頼の中にこそあるのであって、信頼は対話の基盤であり、対話こそが平和の基盤です。

残念ながら、今日のグローバル社会、特に世界政治においては信頼が欠如しています。その欠如の原因はエゴイズム、又はナショナリズムです。一方で、俳人は個人ではあってもエゴイストではありません。俳人は個人の感情を表現しますが、自らが自然や宇宙に依存する存在であることを忘れてはいません。それと同様に、私たちは、国と国との関係においても相互依存していることを認識しなくてはなりません。それを認識した欧州の国々が、統合と協力という新しい枠組みに参加して生まれたのが欧州連合（EU）です。EUのおかげで、かつてない70年もの平和を享受することができています。

不幸せは常に利己主義、自己本位主義に結び付いています。私たちは自分と他人を比較しがちです。それに対し、俳句は広い視点から物事を捉えること、私たちはもっと広い世界の一部であるということを教えてくれます。

不安と不確実に満ちた時代において、世界が最も必要としているのは穏やかさです。自分自身と自然、世界で起こっている出来事との間に距離を置かなければ、穏やかさは生まれません。俳人は観察者です。作句のためには情熱的である一方で、超然とした態度も必要です。技術革新、デジタル化が進む今日、合理化が進むにつれ不安感や怒り、憎悪などが増幅していますが、そのような世界こそ、バランスの取れたアプローチが必要です。私たちは新しい世界の一部ではありますが、それと同時に、そこに完全にはまってしまってはいけません。俳句はまさに今日の世界の矛盾を表していて、俳句こそが現代の混乱を解く答えになっているのです。

ギリシャやローマの時代、徳の高い人々は真実・善・美という三つの美徳を常に求めていました。俳句にはこの三つが備わっています。真実については、俳句は事実や経験を基にして創られるものであり、そういった信憑性が俳句の長所でもあります。善については、善き者であろうとするには物事の良い面を見る努力が必要ですが、俳句は世界を穏やかな気持ちでバランス良く見る機会を与えてくれます。そして、美については、これこそが俳句の本質です。言葉の持つ音楽、想像力への働き掛け、自然の中の出来事や進化に馳せる思い、全てが美に満ちています。これら三つの美徳は普遍的なものです。西洋だけ、日本だけにあるものではありません。ですから、俳句は日本にだけあるものではないと言えます。私たちはグローバル化のおかげで、文明や文化の良いところを互いに知ることができるようになり、自らの哲学や精神性に取り込むことができるようになりました。私がここ奈良で、俳句への愛を皆さんにお伝えできるのも、グローバル化のおかげです。

「花ざかり　山は日ごろの　あさぼらけ」。これは、松尾芭蕉がこの地、奈良で詠んだもので、芭蕉が絶対的なもの、その美に飽くことなく専心していたことがよく分かる句です。当時閉ざされていた日本で詠まれたものでありながら、そこに表される感情は普遍的な感情でもあります。

「戦終え　かなう最古の　ノーベルの夢」。これは、EUがノーベル平和賞を受賞した時に、私が詠んだ句です。戦いが終わり、そして、全ての人の望みである平和が達成されました。これこそがノーベルの夢だったのではないでしょうか。

「友となれば　朝日も星も　同じ空」。日本とEUの親善について詠んだ句です。昇る陽は日本、輝く星はEUのことです。これらが同じ青い空の上で輝いている。親友になれば奇跡を起こすことができる。皆さん方は私たちにこういったことの本質を教えてくれたのです。